
目を刳り貫く音

会津遊一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目を剝り貫く音

【Nコード】

N3514H

【作者名】

会津遊一

【あらすじ】

私は母が嫌いだ。あの女とは側にも居たくない。今まで優しい父親が居るからこそ、耐えられてきたのだが……。

私は、母が嫌いだ。

近くに居るだけで、胃の底から黄色い反吐がこみ上げてくる。

側にいるだけで二の腕に蕁麻疹が走り、下腹部の奥がズンと重くなる感じがする。

どうしても、あの魚の様に無機質に光る瞳で見詰められていると、頭が鋭い痛みに襲われるのだ。

子供の頃、私はカゼで寝込んでいた日があった。

無性に喉が乾いたので部屋から出ようとするも、戸を開けることが出来なくなっていた。

外につつかえ棒が合ったのだ。

朦朧とする意識の中でも、私は部屋に閉じこめられた事だけは理解できていた。

諦めて布団に潜り込むと、やがて父では無い男のあえぎ声と、嫌らしい雌の声が響く。

幼心にも、これでは父が可哀想そうだと思った。

自然と涙がこぼれ落ちた。

私が目を覚ました時、口元は吐瀉物で汚れていた。

少し、血が混じっていたのを覚えている。

中学の時、母が私に注意してきた事がある。

あの魚の様な目で睨み、スカートの裾を上げろと言われた。

私は胃がシクシクと締め付けられ、口の中に胃液が逆流した。

学校に向かう途中、何故お前に言われなければならないんだと、悔し涙を流した。

高校に入った時、私は操り人形でいる事を止めた。

今のままでは母と同じ人生を辿りそうだったからだ。

何より、私には寡黙で優しい父がいた。

直接助けてくれたことはないが、側にいるだけで心が安らんだ。

あの人に迷惑をかける事だけはしたくなかった。

だが、全ての終わりを告げる言葉は余りにも唐突だった。

いつもの様に口喧嘩をしていた登校前、母は吐き捨てる様に言った。
お前はあの人の子じゃなくて、私としか血が繋がっていないんだよ、と。

その瞬間、私の頭の中に白い世界が広がった。

目の前が見えなくなり、夢心地の様な浮遊感が体を包み込んだ。

気が付けば顔面に包丁を突き刺していた。

眼窩の隙間に薄い刃が入り込むと、まるで詰まっていた物が取れる様に、糸の繋がった眼球がポトリと床に落ちていた。

何て事だろう。

私はなんて事をしてしまったのだろう。

喉の奥から、自分ではない獣の声が漏れていた。

私は手で顔面を隠し、痛みから逃げる様に身体を壁に叩き付けた。

それでも顔の痒みは無くならない。

狂った様に掻き claw とうとする。

だが、分厚い包帯に遮られ、皮膚に爪を立てることすら許されない。
苛立ちだけが募った。

刺した時の生々しい音だけが、私の頭の中で木霊していた。

今まで分厚いガラス越しに、彼女のことを眺めていた二人の学者が
口を開いた。

「彼女は何故、自ら自分の眼球をくり抜いたんでしょうか」

「……さあな。そういえば、他にご家族はいないのか？」

「両親は彼女が生まれた時点で死んでいます。それと一つ、刑事から不思議な報告が」

「なんだね？」

「彼女の家では食卓に、必ず目が刳り抜かれた人形が2体置かれていたらしく……」

(後書き)

ご感想などありましたら、お気軽に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3514h/>

目を刳り貫く音

2011年2月1日17時40分発行